

科学研究費助成事業（基盤研究（S））事後評価

課題番号	18H05274	研究期間	平成30(2018)年度～ 令和4(2022)年度
研究課題名	ペプチドシグナルを介した植物成長の分子機構	研究代表者 (所属・職) (令和6年3月現在)	松林 嘉克 (名古屋大学・理学研究科・教授)

【令和6(2024)年度 事後評価結果】

評価		評価基準
	A+	期待以上の成果があった
○	A	期待どおりの成果があった
	A-	一部十分ではなかったが、概ね期待どおりの成果があった
	B	十分ではなかったが一応の成果があった
	C	期待された成果が上がらなかった
<p>(研究の概要)</p> <p>本研究は、近年注目されているペプチドシグナルが植物の成長制御に及ぼす影響について、複数のアプローチから明らかにすることを目指している。</p>		
<p>(意見等)</p> <p>複数のアプローチにより、研究代表者らが既に見つけていた植物ペプチドホルモン PSY とその受容体 PSYR による、植物成長とストレス応答の切り替えを制御する新奇な作用メカニズムを解明した。また、葉の窒素需要を根に伝える篩管移行性ペプチド CEPDL2 の発見とその作用の解明、及びそれに基づいた植物の窒素吸収制御機構のモデルの提唱、CEPD1/2/CEPDL2 の下流で硝酸トランスポーター-NRT2.1 の活性化を担う脱リン酸化酵素の発見とそれによる硝酸吸収の仕組みの解明等、いくつかの重要な結果が得られ、期待どおりの成果があったと評価できる。</p>		